

学部

2017（H29）年度
「卒業生満足度調査結果の検討」

大学院

2017（H29）年度
「修了生満足度調査結果の検討」

大阪電気通信大学

教育開発推進センター

Center for Educational Development (CED)

目次

学部

2017 (H29) 年度 「卒業生満足度調査結果の検討」

| | | |
|-------------------|-------|----|
| 工学部 | | |
| 電気電子工学科 | | 2 |
| 電子機械工学科 | | 6 |
| 機械工学科 | | 7 |
| 基礎理工学科 | | 8 |
| 環境科学科 | | 14 |
| 情報通信工学部 | | |
| 情報工学科 | | 16 |
| 通信工学科 | | 19 |
| 金融経済学部 | | |
| 資産運用学科 | | 21 |
| 医療福祉工学部 | | |
| 医療福祉工学科 | | 23 |
| 理学療法学科 | | 26 |
| 健康スポーツ科学科 | | 27 |
| 総合情報学部 | | |
| デジタルアート・アニメーション学科 | | 29 |
| デジタルゲーム学科 | | 30 |
| 情報学科 | | 31 |
| 共通教育機構 | | |
| 人間科学教育研究センター | | 34 |
| 英語教育研究センター | | 36 |
| 数理科学教育研究センター | | 37 |

大学院

2017 (H29) 年度 「修了生満足度調査結果の検討」

| | | | |
|-----|--------------------|-------|----|
| 大学院 | 工学研究科 | | |
| | 先端理工学専攻 | | 40 |
| | 電子通信工学専攻 | | 43 |
| | 制御機械工学専攻 | | 44 |
| | 情報工学専攻 | | 45 |
| 大学院 | 総合情報学研究科 | | |
| | デジタルアート・アニメーション学専攻 | | 46 |
| | デジタルゲーム学専攻 | | 47 |
| | コンピュータサイエンス専攻 | | 48 |
| 大学院 | 医療福祉工学研究科 | | |
| | 医療福祉工学学専攻 | | 49 |

学部

2017（H29）年度

「卒業生満足度調査結果の検討」

2017年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018年7月6日

工学部 電気電子工学科

2017年度主任 海老原 聡

選択式設問

国際的な視野に対する選択式設問 7a～b は、寝屋川キャンパス全体平均よりも 0.4～0.5 だけ高い結果となった。この理由については明らかでないが、例えば、伊与田研究室では卒研究生でも卒業研究に関する発表を海外で行わせるなどの試みをしており、このような学生を中心に他の学生へ国際的な視野を広める効果があった可能性がある。この設問を除いた選択式設問では、寝屋川キャンパス平均値に対し±0.2以内の差となり、統計的にはほぼ等しいと考えられ、本学科は寝屋川キャンパスの平均的なレベルにあると思われる。

自由記述設問

各設問で、とくに学科の教育に関するものに対し以下のように考察と検討をした。

[D]あなたが本学でよかったと思う点

本学科を卒業することで専門性を身に付けることができたというコメント：

「専門の分野があることで強みになった。」

「専門知識がついた。」

「研究に対する基本的な考え方が身についた。」

があった。本学科での卒業研究、専門科目の充実に対して評価されたと思われる。また、本学科では、1年次生から実験科目を多く配置し、卒業研究でも実験を多く行うことが多いことから

「実験での教員の指導が的確だった。」

「実験では協力し合うことができる。」

「実験の設備がよかった。」

のコメントがあり、今後も実験授業による実学を重視した指導を行いたい。学生への接し方について、とくに離学率を抑えるという意味でも学生に対するケアを充実させるようにしているため、

「先生の指導が分かりやすかった」

「グループ担任はよかった。」

「わからなかった所を後日聞きに行くとていねいに教えてくれた。」

「分野ごとに専門の教員がおり、適切な指導をいただけたこと。」

のようなコメントを受けることができたと考えている。学科の有志教員により電験講習会を実施するな

どにより資格支援を充実させているので、

「資格のサポートがあったこと。」

「資格支援」

のように、評価するコメントを受けた。今後も学科として資格支援を充実させる。

[E] あなたが本学で改善すべきと思う点

本欄は要改善項目として重要であるので、学科に関連した記述全てを以下に掲げ、考察する。教育全般に関しては

「質問をする力、その方法、質問力を身に付けるスキルを伸ばす方法を教えてほしい」

があった。上記は、調査や研究結果の発表やそれに対する質疑応答などにより培われるものと思われる。卒業研究ではゼミナールなどが行われているが、3年次以下の科目では、近年、キャリア科目などで上記内容が増えている。さらに専門科目や実験科目等でも、質疑応答の機会を増やせるように検討したい。専門科目については

「専門科目を極める」

があった。教員側の認識としては、専門科目を設置しても卒業のための最低限の単位取得しか行わないことが課題となっている。現在の4年次生から、専門科目の履修を奨励するため、アドバンスコースを設置しているので、これを今後も進めていきたい。教育システムや時間割編成に関しては

「クォータ科目をなくしてほしい」

のコメントを受けた。クォータ科目自体は、学生と教員ともに、大方良好に受け止められていると考えているが、時間割によっては再履修科目がとりにくい状況も発生しうる。上記のコメントに関連して

「必修科目を再履修する時に別の必修科目とかさなっていたのを無くすことをしてほしい」

「授業の空き時間が多くなっていた感じがした。あまり、空き時間はないほうがいいのかも」

「必修科目を再履修する時に別の必修科目とかさなっていたのを無くすことをしてほしい」

のコメントがあった。本学科の場合、クォータ科目、実験科目や演習科目が存在し、時間割編成に一定の制約を与えるので、時間割編成は難しい一面がある。以上のコメントについては、時間割編成作業で念頭に置くようにする。そのほか

「授業のうるささ」

があった。各教員で授業には工夫をしているが、本学での授業経験が無い非常勤講師の方などの場合には学科教員としっかり連携をし、本学学生の特性などの伝授などをしていきたい。また、

「SA、TAの人数をふやす。」

があった。2017年度卒業生が在学中は、大学院院生が非常に少ない状態ということもあり、そもそも教員側がTAを確保することが難しかった。SAについても、就職活動などの多忙などにより、確保が難しいことがあった。現在はある程度TAの定員が充足されていると思われる。研究発表に関しては

「学会発表など研究室の成果などをPRしてほしい」

「他大学へのアピールを強めてほしい。」

「研究についてのPRをしてほしい 学会発表とか」([G]の設問から抜粋)

があった。各研究室の成果は学会や学術雑誌などで発表されており、これを卒研生達にもしっかり伝えられるにする。その他のコメントとして

「情報の伝達が細部への配慮に欠けていた」

「情報の伝達」

があったが、具体的にどのような情報伝達についてかが分からなかった。これについては、心当たりがあるかを在學生などにも聞き取りを考える。

[F]あなたにとってとくに役に立った、あるいは印象に残っている科目名

この欄については、各教員が読み、受け止めるということにする。なお、企業連携講座については

「送配電工学：企業の人に教われるから」

のコメントがあり、今後もこの科目を推進したいと考えている。

[G]あなたの現在の感想も含めて、大阪電気通信大学への要望、提案など

学科に関するものとして

「学年の上下間の交流が少ない」

「精神的に弱い子は表に出していなくても少なからずいるので、そういう子がいやすくしてほしいです。」

があった。本学科でも既に SA 学生が授業の補習に参加し、後輩学生から好評を得ている例がある。このようなものを拡充していくことはよいと考える。また、表面上はわからない「精神的に弱い子」の存在は、教員側でも時折認識する場合があった。このような人に関する情報交換を、グループ担任を中心に一層行っていくようにする。

なお、大学への設備の要求は学科で扱うものでないと考えますが、「ロッカールームの設置の要望」が目立ったので、申し添えさせていただきます。

以上

2017 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018 年7月 10 日

工学部 電子機械工学科

2017 年度主任 兼宗 進

2017 年度の卒業生満足度調査を学科で検討した。

(満足度の高い項目)

- ・ 実験の満足度が高い。実験設備、実験職員、グループでの実験は引き続き継続したい。
- ・ 授業での教員と TA のわかりやすい説明、ゼミでの丁寧な指導を継続したい。
- ・ 就職支援室の新設、就職課と連携した就活支援を継続したい。
- ・ 自由工房は継続して活動したい。

(改善を行う項目)

- ・ 学生連絡のオンライン化を進める。
- ・ 非常勤講師の対応について、学生から苦情があれば対応する。

以上

2017 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018 年 7 月 10 日

工学部 機械工学科

2017 年度主任 井岡 誠司

[A] 学生が獲得した知識・能力に関する項目について

学生が獲得した知識・能力に関する項目では、「国際的な視野」の項目が全て低くなっている。特に、「獲得していない」、「あまり獲得していない」の回答をした人の数が他の項目に比べて多くなっている。この傾向は昨年、一昨年と同様であり、機械工学科だけでなく、工学部全体でも同様になっている。これは、本学には留学生が少なく、外国人との交流がほとんどないことが、そのまま学生の評価に表れていると考えられる。この問題は学科単独で解決できる問題ではなく、大学全体で議論すべき問題である。

また、「幅広い分野にわたる教養」「専門的な知識・技能」の項目では、「十分獲得した」「ある程度獲得した」の回答をした人が、昨年度よりも減少している。これは、授業の内容を十分理解できなかった人がいるということが考えられるが、逆に現状の授業のレベルに満足していない人がいる、ということも考えられる。自由記述にも、授業内容のレベルアップ、より専門的な内容の授業を望むものがあった。成績上位者の満足度を上げるための方策が必要であると思われる。

[B] 授業科目群、教育設備・機器に関する項目について

授業についての評価を見ると、専門科目・基礎専門科目、卒業研究の評価に比べると総合科目の評価が少し低くなっている。特に「総合科目（英語科目以外の外国語科目）」では「悪かった」の評価をした人が 10%強（8 名）となっている。ただ、自由記述にはこれに関するものが見当たらず、具体的にどのような点が悪かったのかがはっきりしない。この傾向は昨年度と同様であり、カリキュラム改訂で検討する必要がある。

設備・機器に関する評価は昨年度、一昨年度とほぼ同じ結果となっている。

資料、事務サービス等に関する項目をみると、就職課の評価が高く、2 年連続で 4.0 となっている。これは、卒業生のアンケートということで、一番よく利用したサービスである、ということが理由として考えられるが、自由記述でも「本学で良かったと思う点」に就職課を上げているものが多く、本学のアピールポイントである充実した就職サポートは十分機能していると思われる。

総合評価について

総合評価は昨年度の 7.3 に比べて今年度は 6.7 と 0.6 ポイント下がっている。上記の[A], [B]の項目の評価を見ると、昨年度に比べて 0.1 から 0.2 ポイント評価が下がっている傾向にあり、それらが積み重なって総合的な満足度が下がったものと考えられる。教員個人、学科で改善可能な点については、評価、自由記述を見ながら改善を図っていきたい。

2017年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018年 7月 2日

工学部 基礎理工学科

2017年度主任 柳田 達雄

卒業・修了生満足度調査結果について

- ・ **【A】**については、2016年度と同等の点数であり、本学の平均値である。この質問事項に対する回答を見ると、「3. 物事を論理的に考える力」および「4. 的確な判断力」の値が上昇しており、また、工学部平均値よりも高く、学科の教育方針が学生の学習効果として現れた結果と考えられる。また、2016年度と比較すると「8. コミュニケーション能力」「9. リーダーシップ」「10 他人と協調して物事に取り組む力」が低下した。これらは、前年度に上昇したが、本年度は低下したため「プロジェクト学習」および「アクティブラーニング」を実施している学年横断型ゼミナールである「基礎理工学ゼミナール 1,2,3,4,5」(基礎理工学ゼミナールテーマ一覧は添付資料を参照)をより継続・推進・して教育・指導を行っていきたいと考えている。
- ・ **【B】**に関しては、前年度とほぼ同等であり、大学全体や工学部全体と比較しても特に大きな違いはない。しかしながら、「5. 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」および「6. 卒業研究やゼミにおける指導」は昨年度に引き続き工学部平均点数より高い状態を維持している。今後も、それらの状況を継続し、より高い評価が得られるようにしていきたいと考えている。
- ・ 総合評価は0.1ポイント上がり工学部の他の学科と同程度のポイントに近づいた。前年度と比較して**【B】**の項目でポイントが上がった点で総合的な満足度が上がったのではないかと考える。しかし、評価の低い項目はいくつかあるので、学生の声に真摯に耳を傾けて改善を図っていきたい。

卒業研究指導について

- ・ プレゼミ・卒研配属については、学生の希望を最大限尊重できるようにし、多くの学生を第1希望の研究室に配属することができた。これによって、学生の卒業研究への積極的な取り組みを促すことができた。
- ・ 教職志望の学生に対しては、それをサポートするようなテーマを与えるなど、学生の志向にあわせてきめ細やかな卒研指導を行った。例えば、「高校の数学における間違い公式の解析」といったテーマで現在の高校数学での教育を精査し、様々な視点から公式の誤解を考察するという卒業研究を行なった。
- ・ 卒研中間発表会を3グループ【数学、理科(宇宙、放射線、地球物理関係)、理科(物性、化学)】に分けて行い、途中経過の確認をおこなった。
- ・ 卒研発表会は学科全体で2日間にわたって行い、卒研生だけでなくプレゼミ生も出席させて大学生活の総まとめとしてのプレゼンテーションを行った(プログラムは添付資料を参照)。そして卒業論文をまとめて、総合的な卒業判定を行った。

1. 資料1 2017_N 基礎理工学ゼミナールテーマ一覧
2. 資料2 2017_N 卒業研究発表会プログラム

基礎理工学ゼミナール テーマ一覧

2017年度前期

| | |
|-----|-------------------|
| 木村 | 数学力を鍛える |
| 中村拓 | 数学パズル・ゲームの制作 |
| 西村 | 代数学の基本 |
| 柳田 | フラクタルをつくろう |
| 原田 | 物理学演習－入門から実践へ |
| 安江 | 音と光を操ろう－続・工学基礎実験－ |
| 中村敏 | 演示実験ビデオ教材の作成 |
| 森田 | 化学ゼミ |

2017年度後期

| | |
|-------|------------------------------|
| 浅倉 史興 | 応用微積分演習 |
| 尾花 | アクティブ輪読「太陽地球系科学」 |
| 多米田 | 宇宙線の応用研究：ミュオグラフィ |
| 林内 | パラパラ漫画で作るゆかいな物理アニメ その2 |
| 萬代 | Mathematica によるソフトの開発 |
| 溝井 | 究極の卵落とし装置を作り上げる |
| 門田 | 社会に役立つ数学・楽しい数学 |

2017年度 基礎理工学科 卒業研究発表会 プログラム

日時：2018年2月13日(火) 9:30～16:50

2018年2月14日(水) 9:30～16:30

会場：寝屋川キャンパス J406

第1日 2月13日(火)

9:30～9:35

開会の辞

柳田達雄 (基礎理工学科主任)

9:35～10:35¹ (座長・時計：中村(拓)研)

安江研究室

1. 様々な条件でトンネル電流の近似式が適用できる電圧の範囲
2. 異なる原子配列のティップ先端に対する走査トンネル顕微鏡像のシミュレーション
3. 曲率半径を変化させたときのティップ先端の原子配列シミュレーション
4. 走査トンネル顕微鏡像の画像処理法の比較



柳田研究室

1. クラリネットの音質解析と波動方程式に基づく考察



10:35～10:45

休憩

10:45～11:57 (座長・時計：安江研)

溝井研究室

1. 太陽電波の観測 I ～太陽の発する電磁波～
2. 太陽電波の観測 II ～測定装置と方法～
3. 太陽電波の観測 III ～パラボラアンテナ～
4. 太陽電波の観測 IV ～観測データの解析と結果～



西村研究室

1. Gröbner 基底



11:57～13:00

休憩

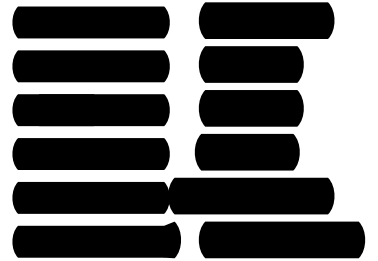
¹

1名の持ち時間12分(講演時間：9分, 質疑応答：3分)

13:00～14:12 (座長・時計：柳田研)

門田研究室

1. 球面三角形の面積と単位球面以外の球面余弦定理
2. 方べきの定理の拡張
3. 地図上での最短線
4. 完全な地球地図は存在しないことの数学的証明
5. 相対性理論と非ユークリッド幾何学のつながり



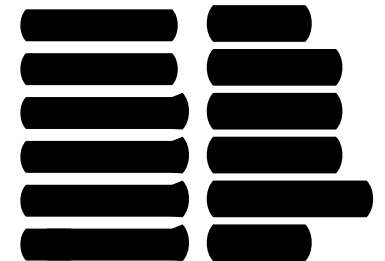
14:12～14:25

休憩

14:25～15:37 (座長・時計：溝井研)

中村(敏)研究室

1. ペロブスカイト型マンガン複合酸化物薄膜の抵抗変化に粒界が与える影響
2. 高濃度マンガン添加酸化インジウムスズ薄膜の結晶構造と物性の評価
3. パイロクロア型イリジウム酸化物薄膜の作製と結晶構造解析
4. 酸化マグネシウム薄膜へのキャリア導入と電気特性に及ぼす効果
5. CO₂を用いた気液界面プラズマによる過ギ酸の生成と定量
6. 気液界面プラズマ反応による過ギ酸の合成と反応メカニズム



15:37～15:50

休憩

15:50～16:50 (座長・時計：西村研)

萬代研究室

1. 高校の数学における間違い公式の解析
2. 円に内接する四角形について
3. べき級数の具体的な表現について
4. 整数度の \sin, \cos の値について
5. 一般論からみた漸化式の解法



第2日 2月14日(水)

9:30~10:30 (座長・時計：門田研)

浅倉研究室

1. 現代物理学によって退治された悪魔
2. 確率変数の収束とフーリエ変換



林内研究室

1. 植物の生体電位測定
2. 直流高電場が植物成長に与える影響

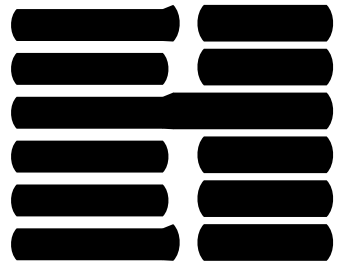


10:30~10:40 休憩

10:40~11:52 (座長・時計：中村(敏)研)

尾花研究室

1. Van Allen Probes 衛星で観測された磁場変動データを用いた磁気圏プラズマ質量密度の推定



2. 地球磁気圏と木星磁気圏の比較

11:52~13:00 休憩

13:00~13:48 (座長・時計：萬代研)

木村研究室

1. 球面上の幾何学とタイリングに関する研究
2. 重力方程式のシュバルツシルト解についての考察



原田研究室

1. 恒星の内部構造

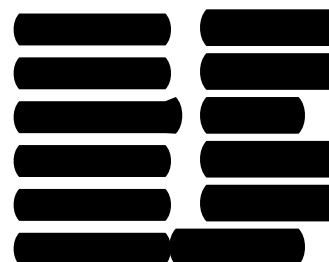


13:48~14:00 休憩

14:00～15:12 (座長・時計：浅倉研)

森田研究室

1. 直鎖ジオール類の溶液における水素結合構造の研究
2. 植物由来化合物の抽出と赤外分光分析
3. 培養下における生細胞の近赤外分光分析
4. In situ ATR-IR 法を用いた PMEА への分子吸着過程の解析
5. In situ ATR-IR 法を用いた MPC 共重合体への塩添加効果の解析
6. PVPh + PVPy 混合系の水素結合構造の研究



15:12～15:25

休憩

15:25～16:25 (座長・時計：林内研)

中村(拓)研究室

1. ユークリッド原論第2巻について
2. 公理的ユークリッド幾何学の世界



16:25～16:30

閉会の辞

萬代 武史 (数理科学センター主任)

2017 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018 年 7 月 23 日

工学部 環境科学科

2017・2018 年度主任 中田 亮生

1. はじめに

環境科学科の 2017 年度卒業生満足度調査結果について、学科会議などで検討した。ここでは、その結果の概要と検討内容、満足度向上のための対策について報告する。

2. 環境科学科の調査結果の概要

[A] 知識・能力の獲得

幅広い分野にわたる教養と専門的な知識・技能 (1, 2) についてはいずれも 3.8 ポイントと比較的高い獲得度を示す。特に当学科では、サイエンスとエンジニアリングの幅広い知識を習得できるようなカリキュラムを構成していることから、それが卒業生に評価されていることが、学生のコメントからもわかる。また、論理的思考力や判断力など (3~6) については 3.6~3.7 ポイントと概ね高い獲得度を示している。特に困難に対する対処力 (6) は 3.7 ポイントと高く、教育の負荷が適切に設定されていると考える。一方、国際的な視野 (7) は 3.0~3.1 ポイントと相対的に低いですが、2016 年度比べると 0.2~0.3 ポイント上昇している。これは、昨年度後期より韓国からの留学生 2 名を学科で受け入れ、彼らとの交流を深める機会を提供したことが良い効果をもたらした可能性がある。また、コミュニケーション能力 (8) と協調力 (10) はそれぞれ 3.5 と 3.6 ポイントで中庸であるが、リーダーシップ (9) が 3.2 ポイントと比較的低い。なお、総合平均は工学部と大学全体がいずれも 3.4 ポイントに比べて 0.1 高い 3.5 ポイントである。

[B] 授業科目群や教育設備・機器など

授業科目群で相対的に高いのは、基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など) (5) と卒業研究やゼミにおける指導(6)で、いずれも 3.9 の高いポイントを示す。逆に低いのは総合科目(英語科目以外の外国語科目) (3) の 3.3 ポイントである。

図書館、パソコンなどの IT、講義室、実験室などの設備 (8~13) は概ね、3.6 から 3.8 ポイントと評価が高い。TA (16) は 3.6 ポイントである。シラバスや事務サービスおよび留学制度 (15~18) は 3.4 ~3.6 ポイントである。一部の設備、事務対応に対する不満があることが、コメントからもわかる。大学祭等の行事(19)は 3.1 ポイントと低く、昨年の 3.4 ポイントより 0.3 ポイント低下している。

合計は 3.6 ポイントで、工学部の 3.6 ポイント、大学全体の 3.5 ポイントとほぼ同様である。

[C] 総合評価

総合評価は 7.2 ポイントであり、これらは工学部の 7.1 ポイント、大学全体 7.0 ポイントよりやや高い。

3. 満足度向上のための対策

現在、以下の 3 点について対策を検討している。

3.1. 授業カリキュラムの改革

すでに専門科目については、より魅力的で学生の将来の目標が明確になるようなカリキュラムの構築をめざし、「食品衛生」、「住環境設計」を新しい柱として改訂作業を進めている^[1]。総合科目のカリキュラムについては、全学的に改革が進められているが、学科としてもより魅力的な内容となるように意見をしている。また、今後、授業を実施する過程でも学科の意見を総合科目に反映することができるよう、3センターと常に協調して取り組む必要があると考える。

3.2. リーダーシップの養成

コミュニケーション能力(8)、協調力(10)に比べて、リーダーシップ(9)が低い結果となっている。そこで今後は、実験科目等のグループワークにおける次の新しい試みを検討中である。

<グループワークにおける新しい試み(案)^[2]>

新入生には友達を作ることが苦手な学生がいる一方で、逆にコミュニケーション能力に秀で、面倒見のよい学生もいる。そこで、実験科目等でグループワークを実施する場合に、そのグループのリーダーを決め、そのリーダーが自然とグループワークを主導するような形を作る。これによって、友達がいななどの理由からレポートが書けない学生もフォローされるように促せ、離学者対策にもなる。詳細については今後、具体的な方法を検討して次年度以降に本格的に実施する予定である。

3.3. プロジェクト等の活性化^[1,3]

大学祭等の行事(19)のポイントが低く、昨年より低下している状況である。当学科では、「ベリーベリープロジェクト」、「カフェラボプロジェクト」、「電池プロジェクト」などのプロジェクト型教育を推進する一方で、「地域連携プロジェクト/ボランティア入門」等の総合科目(キャリア形成群)を通じて、大学祭等と同様なイベントに関わることができるように積極的に勧めている。引き続き、このような活動を活性化させるように努力する。

参考資料

[1]中田亮生・齊藤安貴子：環境科学科の取り組み事例紹介、2017年12月20日、全学教授会にて発表(本学四条畷キャンパス)。

[2]中田亮生：環境科学科の離学者に関する検討と対策、平成30年7月9日付で学生課に提出(非公開資料)。

[3]中田亮生・齊尾恭子：アクティブ・ラーニング型新設科目「地域連携ボランティア入門」の充実、平成30年6月14日、2018年度教育開発推進センター主催FD+SD研修会開催FD+SD研修会にて発表(本学寝屋川キャンパス)。

以上

2017年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018年7月9日

情報通信工学部 情報工学科

主任 竹内 和広

1. 総合的評価の結果について

2017年度卒業生満足度の総合的評価（項目[C]）は10段階の主観評価において、2016年度の平均7.2から、2017年度が平均6.7へと0.5低下した（2015年度は平均7.1）。以下に、この評価低下についての検討と、それに基づく、情報工学科の現行教育の課題認識とその改善方針を示す。

2. 質問項目[A]群の結果について

質問項目[A]群の「本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか」に関する回答は、2015年度、2016年度、2017年度と一貫して平均3.3であり、大きな変化はない。このように、卒業生の本学科での学びに関する自己評価の傾向は変化していないと言える。具体的な自己評価の傾向は、自由記述の回答に多くみられ、特に卒業研究に係る記述が目立つ。例えば、実践的な問題解決能力、および知的生産活動に不可欠な口頭発表・文章構成の能力が身に付いたことを自己評価として挙げている。これは、指導教員が4年生に研究の進捗状況を定期的に報告させつつ適切な助言を与えるほか、研究発表の訓練の場を前期・後期の終わりに中間発表会などの形で設け、学科全体の発表会の予稿や論文の添削指導も複数回にわたって綿密に実施する、情報工学科の教育の特徴が有効に機能しているものと考えられる。また、質問項目[A]群中の、「A-5 他人と協調して物事に組み込む力」の平均評価値が2016年度から0.2向上し、3.8と上昇傾向がみられた。本学科がカリキュラムポリシーの(1)獲得すべき力として掲げる、CP-P-1-1とCP-P-1-3を初年次から錬成するため、Cプログラミング入門演習、コンピュータ工学、情報キャリア入門等の初年次科目から、友達同士で分からないところを教え合い・議論する機会の醸成を目指した、教育実施における継続的な検討・改善が機能していることをうかがわせる。

3. 質問項目[B]群の結果について

質問項目[B]群の「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて全体的に評価してください」に関する回答は、2016年度平均の3.5から2017年度には3.4に低下し、小計区分B1～B7、B8～B14、B15～B19についても、それぞれの平均が2016年度の(3.6、3.6、3.3)から2017年度には(3.5、3.5、3.2)へとそれぞれ0.1の低下がみられた。このように、冒頭に記した総合評価（項目[C]）の低下は、質問項目[B]群に対する回答傾向の変化に係るようと思われる。そこで、左記を前提に、質問項目[B]群に当該するカリキュラム、教育設備・機器、事務サービスその他の要素について検討した。

カリキュラムに関する回答項目B1～B7では、評価の平均値が0.2以上低下した項目が存在する。具体的には、「B4 基礎専門科目・専門科目(講義)」(2016年度3.8→2017年度3.6)と「B5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」(2016年度4.0→2017年度3.7)、「B7 教職科目」(2016年度3.5→2017年度3.3)である。このうちB4およびB5の両項目とも、2016年度、2017年度それぞれの回答者の約半数が

最頻の評価値である評価4を回答しており、高い満足度を維持していることは確認できる。

B4項目に関する詳細な検討の前提として、情報工学科の専門科目履修の特徴は、いくつかの実験・演習科目等を除いて大半が選択科目である「完全自由選択制」を採用していることがある。すなわち、学生は自分の興味対象に応じて、多様専門科目を履修できる。実際この点は、今回の自由記述回答の記述内容でも依然高く評価されている。しかし、その反面、近年の本学科学生の中には、入学前の情報に関する認識を改めることなく、情報工学の専門性を認識できることができず、2年3年次になっても、自らの将来設計や履修計画を立てることが難しい学生の存在が、2017年度のB4項目の低下に関係する可能性がある。

B5項目に関しては、評価4の回答割合が2016年度48.6%から2017年度53.8%と増加した反面、評価5の回答数が減少した点が特徴的である。自由記述の回答においても、卒業研究に関する肯定的な記述が依然多数であることに比較して、特に2年次3年次での実験に関する肯定的な記述は減少傾向にあり、未体験の専門的対象を実験・実習する手を動かす行動に対する学生の意識変化の可能性を示しているように思われる。

他方、質問項目[B]群の3つの小計区分の中では、事務サービスその他の要素に関する項目B15～19の平均評定が最も低い。具体的な内容を自由記述回答の中に対応する記述を求めてみると、履修や成績などに関する連絡方法の多さや複雑さに対する不満が多く挙げられている。現在、学生に対する連絡の方法は、学内の複数の掲示板、電子メール等の手段が混在しており、これらを統合する要望が多かった。そのような背景から、統合的な情報連絡・管理システムとしてOECU MyPageが全学的に導入され、活用がなされるようになってきたが、当該システムの使い勝手の悪さや情報処理機構の非柔軟性から、運用側と使い手側との不整合が生じるようになってきており、近年の高度に利便性の増した情報システムに慣れ親しんだ学生には、不満の多いものとなっている。システムそのものの改善も今後の課題であるが、情報連絡・管理システムの運用体制の整備およびその教育が必要である。

4. 現行の学科教育の課題と改善方針

質問項目[A]群に対する回答の通時的一貫性に対する、質問項目[B]群の低下項目および総合的評価の低下は、情報工学科の次期カリキュラム改定の重要性を示しており、既に、学科内にカリキュラム検討WGを組織し、卒業生満足度調査結果だけではなく、より客観的な情報を導入し、カリキュラム改定を詳細に検討している。

既に同WGの検討結果は、現行カリキュラムの中でも授業ごとの科目内容は実施可能な点から、漸進的に見直している。例えば、初年次教育においては、授業内容を極度に難しくあるいは易しくなり過ぎないよう配慮し、成績分布を適度な範囲に収めるとともに、学生の学習意欲・成長意欲や達成感を助長し、自律的学習習慣を涵養するように努めている。

また、大学での学修習慣の形成にかかる時間は特に入学時に学生毎に差があることから、初年次必須科目について講義に迫り多様な道筋を提供できるよう、e-learningシステムの活用した多様な学習支援を実施している。また、2年3年配当の殆どすべての科目についても、学生が初めて学習する対象にたいして、自分の理解度を確実に把握し、自学自習の動機を与えることを目的として、2～3週間の頻度で理解度確認試験を実施する講義形態に移行した。

情報工学科では、2、3年次における電子基礎実験・情報工学実験において実験レポート添削を徹底的

に行ってきた。具体的には、体裁・内容が不十分なレポートには再提出を課し、合格基準に達するまで何度も再提出を繰り返させ、これによって、4年次の卒業論文やさらには就職後のコミュニケーションの基盤となる文章力の訓練の機能を担ってきた。しかし、上記3で記した、2、3年次の実験科目を受ける時点において、近年の学生の未知の専門的対象に対する動機付けが若干消極的になっている可能性に対応すべく、現行カリキュラムにおいても学科専任教員が担当する1年次および2年次のキャリア形成科目のカリキュラム内容を修正し、初年次から専門科目や実験科目の学ぶ意義を理解できるよう、専門に関わる教養や文章のもつ機能的役割を理解できる教育内容に修正した。また、実験科目についても、特に3年次の情報工学実験について、実験テーマを整理し、段階的に計画的な実験とそれに対応する文章記述を指導する形式を導入し、より対話的に多様な学生の進捗状況を把握した実験指導できるよう努めている。

以上のような取り組みを通して、多様化する社会からのニーズに対して、情報工学科のディプロマポリシーである、情報を扱う基盤的かつ横断的な知識と技術を身に着け、多様な分野に応用展開できる卒業生を今後も継続的に輩出することを目指し、卒業生の自己評価を高めることに貢献したい。

2017 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018 年 7 月 6 日

情報通信工学部 通信工学科

2017 年度主任 前川 泰之

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

通信工学科では、「情報通信社会を支える幅広い分野で活躍できる技術者を育成すること」を教育目標として、学科カリキュラムポリシーに基づいた教育・学習指導を行ってきた。

学科カリキュラムの位置付けとして、通信工学の基礎となる「通信方式・ネットワーク・プログラミング」の3要素をバランスよく教えることと、主な2分野として「ハードウェア技術(Hコース)とソフトウェア技術(Sコース)」を扱う2コースを設けている。そして、これらの系統立った分かりやすいカリキュラムマップを作成し、総合科目との関連を明確にした上で、学生たちに科目履修の的確な指針を与えている。

また、シラバスでは、多くの授業科目において他の科目との関連性を示すとともに、それらの講義内容がその後の専門科目でどのように生かされるかを詳しく記述した上で、到達目標や毎回の授業前後における予習と復習についても明確に内容を示している。

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

(1) 教育改善や授業点検

平成 29 年度の専門科目の授業アンケートの総合評価の平均値は、前期が 6.70、後期が 6.80 ポイントであり、前年度より 0.1~0.2 ポイント程度減少しており、さらに分かりやすい授業の実践に取り組む必要がある。

昨年度からアンケートの取り方が、後日 Web 入力を行う方法から紙ベースのアンケート用紙配布によって授業時に直ちに回答を求める方法に変更されたため、アンケート実施率と回収率の大幅な改善がなされて正確なデータが集計されるようになった。今後も引き続き全科目でのアンケート実施が実現できるように努力する。

また、前年度まで一部の非常勤講師の授業で満足度の極端に低い科目があったが、本年度は講師が交代したため、満足度は 7.2 と学科の平均以上に向上した。

(2) 成績評価(平均点、成績分布、合格率など)

前年度に引き続き、1 年次の基礎専門科目である「基礎電磁気学 1・2」、「電気回路 1a・1b」、および「プログラミング基礎演習」について、主に新入生を対象とした学習効果測定を行った。「基礎電磁気学 1・2」の合格率は 73%であり、「電気回路 1a・1b」と「プログラミング基礎演習」の合格率は同様に 75%と 68%と前年より低い値を示し、今年度の新入生の学力の低下が少し懸念される。

また、2 年次以降ではカリキュラムマップを利用して、前述の通信工学 3 要素である「通信方式・ネットワーク・プログラミング」の各系統の科目を各自がバランスよく取得しているかを成績配布時に調べて個別に指導した。また、2 年次から 3 年次への進級率は 75.3%と前年度とほとんど変わらないことが分かり、既に 90 単位以上取得している学生も半数近くを占めている。これには 3 年次を迎えるにあたって進級や就職に対する意識が増加して、さらに資格取得を目指すために 3 年次での授業時間に余裕を持たせるための意識が強くと現れていると言える。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

(1) 履修指導

1年生には、入学直後の学科オリエンテーションやグループ担任との面談において、通信工学科で必要な基礎専門科目やキャリア授業がいずれも必修科目であり、それらの科目の重要性を強調して決して取りこぼしをすることのない様に厳しく指導した。2～4年生には OECU My Page によるポートフォリオ入力が電子化されたことにより、成績配布時に取得科目の系列が可視化されて大変分りやすくなり履修指導が容易になった。つまり、基礎専門科目や専門科目の重要性が具体的かつ体系的に説明可能となり、例えば、数学、電気回路、電磁気等の基礎的な科目が十分理解できていないと、それに続く2年次と3年次の専門科目の単位取得が著しく難しくなることが、いわば論より証拠で一目瞭然に示せるようになったことの意義は大変大きい。

(2) 教育・生活相談

各学年の学生を10名程度の8グループに分け、8名の教員が各グループの学生の修学指導や生活全般への指導を行った。また、各教員は週1コマのオフィスアワーを設け、今までの様に緊急あるいは突発的な要件のある特定の学生以外にも、多くの学生に直接指導できる機会を設けている。しかし、依然としてまだまだ自ら積極的に訪ねてくる学生は少なく、さらにオフィスアワーのアナウンスと実効性に努める必要があると思われる。一方では、TAやSAを行っている院生や卒研生を間に立たせることも、学生がオフィスアワーを気安く利用できることに効果が有る様である。

(3) 就職指導

1～3年生のキャリア授業で、将来働くイメージ作りや就職活動に対する心構えなどについての教育を行った。特に就職活動を間近に控える3年生に対しては、「キャリア設計」の授業において情報通信業界で実際に活躍する卒業生や企業の採用担当者等を招いた講演会を実施して、社会で求められる人物像に対する認識を深められるように配慮した。また、3年次のインターンシップに参加した学生は15名と昨年度よりもさらに1名増加しており、就職対策委員に加えて、各学生の担当教員やプレゼミナールの教員もインターン先の企業訪問を行い、インターン報告書や報告会の発表を指導するなど、就職指導に大きく関わった。

就職指導に関しては、学科教員と就職部職員が連携して学生の指導に当たった結果、進路決定率96%を実現することが出来た。前年度同様にほぼ100%に近い成果を達成した。

4. 卒業研究指導について

平成29年度も前年度に引き続き、2月末の卒業判定時において、内容や提出期限等のチェックが厳しく行われたが、幸い提出期限等で問題とされる学生は存在しなかった。ただ、適切なテーマの選定や普段の取り組み方、普段の出席状況、あるいは発表での態度や方法（メモを読み上げるだけ）等で注意された学生はいたが、概ね判定は良好であった。この結果、4年次生78名中、休学者等を除き、卒研発表を行なった73名全員が合格となった。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

平成29年度の「卒業生満足度調査」では、[C]総合評価においては7.0ポイントと前年度の7.2ポイントをトータルで少し下回る結果を得ている。しかしながら、[A]の知識能力獲得や[B]の教育設備機器等の評価では、ほぼすべての項目で前年度を上回っている。その中でも特に目につくのは「7a～7cの国際的な視野」に関する項目が前年度よりも0.5

～0.6ポイント上昇しており、これは前年には同ポイント程度低下したのと逆の傾向になっている点が注目される。また、[B]の「6. 卒業研究やゼミによる指導」が4.0ポイントと昨年度の4.3と同様に高い値を示しており、このことは同調査の個々のコメントからも伺えるように、学生は卒研等の教員からの個別指導には特に大きな満足を感じてくれる様である。

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など

(1) 資格取得の支援

授業や資格支援講座を通して、通信技術者として必要とされる以下の資格取得を、学科を挙げて積極的にサポートしてきた。これまでに学科教員等により「無線従事者」、「電気工事士」、「電気通信の工事担当者」等の資格取得講座を放課後に開講することなどを行うことで、今年度は以下のような資格取得者の実績が得られ、特に無線通信分野での指導の効果が大きく現れる結果となった。

○第一級陸上無線技術士6名（前年度9名）

○第一級陸上無線技士(卒業時に試験免除による)30名（前年度20名）

○第二種電気工事士4名（前年度2名）

(2) アクティブ・ラーニングへの取り組み

通信工学科の多くの授業では、講義で学んだ内容を授業時間内に小テストやレポートで報告させ、学生の授業への理解を深めて知識が定着するように工夫を行っている。また、キャリア授業等を通して、コミュニケーションスキル、グループディスカッション・プレゼンテーション力が高められるように指導を行ってきた。その結果は、これまでに述べた通り、単位取得率、進路決定率、および卒業生満足度調査結果の向上に貢献していると言える。

(3) 離学者対策

特に1～2年次の低学年で欠席が目立つ学生に対しては、グループ担任から当該学生あるいは保護者へ頻繁に連絡を取り、授業への出席を促すとともに欠席理由の聞き取り等を行った。また、これらの欠席者の状況については、学科内のみならず学生課とも情報を共有し、離学者対策に取り組んだ。この結果、学科全体の離学者率は前年度の6.9%から今年度は5.4%まで減少したものの、当面の目標値とする5%以下をまだ超えた値となっている。このことは依然として1年次生、特に1年次留年生の離学者が多いことが大きな原因の一つとなっており、例年の様に5月頃から全く出席しなくなる学生が数名以上存在する。これらの学生は指定校推薦入学した学生が多く、学力に根本的な問題があると考えられる。また、一般入試においても志望外入学する学生が離学者となるケースが多々あり、今後如何に第一志望の志願者を学科として集められるかが、離学者対策の大きな鍵を握ると言える。

7. 添付資料（あれば）

特になし。

2017年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018年7月6日

金融経済学部 資産運用学科

2017年度主任 永島 道芳

卒業生満足度が2016年度卒業生（2013年入学）から2017年度卒業生（2014年入学）へ1ポイント低下している。これは有意な変化と理解し、原因を考察する。

2017年度より4名の教員が入れ替わったが、3年生までに殆どの授業を受け終わっていること、また、専門ゼミⅡ（4年生ゼミ）は従来教員が担当したことを考慮すれば、影響を与える教員構成に変化は少ない。

それに対して、学生構成は2014年入学から大きく変化している。2014年から志望外入学（まわし）が始まり、2013年までは一応は金融経済学を意識して入学してきたが、2014年からは金融経済を全く意識していなかった学生が増えている。2014年入学生では約40%が志望外入学生であった。その結果、数学などの理系科目は比較的よく出来る学生が増加したが、授業への反応の希薄な学生が増えたと言う金融教員もいる。金融経済に興味を持たないまま卒業した学生が増加したことが、卒業生満足度が低下した大きな原因と考える。

また、2017年度卒業（2014年入学）は志望外入学の初年度で、教員もその変化に対応できなかったと思われる。今後は各教員が今回の結果を把握し、多様な興味に対応して授業を進める。

2017年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018年7月5日

医療福祉工学部 医療福祉工学科

2017年度主任 藤川 智彦

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

教育目標は、カリキュラム・ポリシーの通り、高度化・多様化する医療技術に対応できる人間力と基礎的知識・技術力について教授研究し、医療・福祉機器の開発や医療現場において活躍できるメディカルエンジニアと高度技術に対応できる臨床工学技士を育成するために工学と医学の基礎を十分に学習させることにある。具体的には、医用工学系について ME1 種および 2 種実力検定試験、医療機器情報コミュニケーター MDIC、臨床工学技士国家試験に合格させる。

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

- 1) 専門科目の授業改善プランを提示し、学習環境改善を図った。
- 2) 1, 2 学年に対して計 5 回（うち、1 回は予備試験）統一問題による実力試験をおこない、成績優秀者を表彰して学生のモチベーション向上を図った。その結果、基礎工学分野ではのべ 65 名、医用工学分野ではのべ 41 名、基礎医学分野ではのべ 167 名の 60%以上得点者を出した。これは、e-learning の学習時間も大きく関連しており、その後の学習過程にも大きく影響するものであると考えている。
- 3) 第 2 種 ME 技術実力検定試験合格者は 2 年次 2 名、3 年次 7 名、4 年次 8 名であった。
- 4) 医療機器情報コミュニケーター MDIC 合格者は 3 年次 2 名であった。
- 5) 臨床工学技士国家試験合格率は 90.6%で（全国平均 73.7%）、29 名の合格者を輩出した。なお、合格率は学科開設以来全国平均を上回っている。
- 6) 第 1 種 ME 技術実力検定試験合格者は 2 名（4 年生）であった。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

昨年度以来、教務委員および臨床実習担当教員を中心とした履修指導につとめ、「履修の取りこぼし」防止をおこない、学生自身が国家試験受験資格に必要な科目の履修状況が確認できるような資料を用いて学生自らが学修状態を把握、管理できるように務めている。また、本学科独自で展開している学生証を用いた来学確認システムにより、事務局との密な連携によって、連続 5 日間の欠席学生を抽出し、離学に至るプロセスを解析できるデータを収集した。なお、対象学生はグループ担任による個別の対応だけでなく、学科独自の学生担当教員を配置し、早期の学生相談に対応している。現在、来学しない学生の把握もできており、離学者の減少に大きく貢献している。今後もこのシステムを活用していく予定である。また、就職指導においても担当教員が研究室配属学生の状況を把握し、学生自身がしっかりと進路を見つけられるように、担当教員が積極的に関与するようにしている。

4. 卒業研究指導について

本学科では、研究室配属の前に「キャリアデザイン」の科目を設け、卒業研究や技術系社会人として必要な基本的スキルを身につけさせている。これによって、視野を広くさせ、学生自身の将来の選択肢を多くさせる工夫をおこなっている。なお、卒業研究配属に必要な研究室訪問もこの授業内でおこない、訪問学生に対して教員が個別に対応するようにしている。卒業研究は3年生後期における「プレゼミ」による事前指導を経て、4年前期末の中間報告、後期中期末の概要提出と口頭試験、後期末の論文提出のすべてを満たす必要がある。内容は生体医工学・福祉工学の各関連分野における調査・実験系の研究である。2017年度は学科会議で進行状況のチェックをおこない、スムーズな運営になるように務めた。本学科所属教員の研究室における卒業要件を満たした学生の卒業研究不合格者は0名であった。なお、これからも学科内で情報を共有し、学生のケアを怠らないよう務める。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

専門知識・能力獲得度について、従来と比較して同様の結果を得た。教養や知識・技能の教授は概ね成功している。依然、知識を利用して応用する能力、リーダーシップに関しては課題が多いが、これに関しては学生それぞれの個性を見極めて対応する必要があるため、成果に時間を要するものと思われる。国際的な視野の養成について、それを可能にする環境の構築を引き続き学科で検討する。授業科目および教育設備において、専門教育および卒業研究の満足度は極めて高かった。自由記述においても印象深いこととして専任教員がそれぞれ良い評価を受けており、ゼミや実習および卒業研究を通して、学生との信頼関係が構築できていることが伺えた。一方で、総合科目については課題が残る結果となっている。総合科目との連携を重視したカリキュラムの再構成が必要であると考えている。四條畷キャンパス全体の問題と考えられるが、いわゆるアメニティ施設や行事が寝屋川キャンパスと比較して乏しいことが伺えるため、学生の不満を解消させるハードウェアの整備が必要であると考えられる。

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など

技術者としてのドキュメンテーション基礎能力を教授するために、「アカデミックライティング」を開講しており、図表の記述、参考文献の提示などの基本的な知識を低学年のおりから徹底させる試みをおこない、「キャリアデザイン」の開講により、幅広い分野の知識に得て、「プレゼミ」や「卒業研究」の中で、プレゼンテーションや卒業論文の作成を可能にするスキルを身につくようにしている。「生体機能代行装置学実習」では、学生自身が興味のある部分を中心に事前に調査(グループワーク)し、その結果をプレゼンすることで積極性を獲得させるとともに、外部講師がその結果から学生の知識レベル情報を得て、実習に役立てる、教える側、教わる側に双方メリットが有るアクティブラーニングをおこなっている。学生諸君自ら興味がある部分に積極的に関わることで、授業への意欲が飛躍的に向上する結果となり、極めて有効であったと思われる。また、「ヒト型ロボット製作実習」では、金属加工から部品を作成し、学生の集団が自ら発案した形態の二足歩行ロボットを製作するなど、実習・演習科目群は学生の自主性を重んじるよう心がけている。さらに、学生中心で心電図読図の勉強会を開催し、高学年の学生が低学年に教える指導をおこなっている。こ

れについては、病院において即戦力として機能する能力であると期待されている。同時に、先輩・後輩の関係を学ぶ人間形成にも役立っている。企業・病院に就職した卒業生が実習補助員として授業に参加し、学生(後輩)に授業内容はもちろん、社会人としての心構えや実体験なども伝え、学生から大変好評を得ている。

7. 添付資料(あれば)

特になし。

2017年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018年7月6日

医療福祉工学部 理学療法学科

2017年度主任 小田 邦彦

総合評価は7.7であり、昨年度（2016年度）7.8と同程度であった。

細目を見ると、[A]本学での大学生活と知識や能力の獲得に関しては、平均3.5で3以上の値を示しているが、昨年度(3.7)よりも0.2ポイント低下している。国際的な視野（特に異文化理解や国際交流）の項目については3.0未満となっており、4年間の学生生活の中で、卒業後の活動にもつながるような交流が持てる機会を検討していきたい。一方、幅広い分野にわたる教養や専門的知識・技能、論理的に考える力、困難に直面してもそれに対処している力、コミュニケーション能力や他者と協調して物事に取り組む力の項目は4.0以上の高評価となっており、今後も継続して更なる向上を目指していきたい。

次に、[B]授業科目や教育設備・機器についてみると、基礎専門科目・専門科目の講義・演習や卒業研究・ゼミなどの指導はいずれも4.0以上の高評価となっていた。教職科目は3.7で昨年度4.1に比して0.4ポイント低下していたが、理学療法学科では習得できない科目であり、学生が回答に戸惑ったと考えられた。

さらに、自由記載の項目を検討した。本学でよかったと思う点については、2年生早期からのゼミ配属や、同期だけでなく先輩、後輩とのつながりの深さ、教員の親身な指導がよいという意見が多かった。今後も、学生の立場に立った細やかな指導を継続していきたい。一方、改善すべき点は、交通の便（特にバスに関わる内容）や設備・環境に関わる意見が多かったが、教育に関わる指摘もあった。授業科目名や時間配置などは、今後のカリキュラム改変時に、よりわかりやすく習得しやすい設定をしていきたい。その他、国家試験勉強等において、多様な学生へ学習意欲や集中力を促していくための取り組みは、今後さらに創意工夫を積み重ねていく必要があると考えられた。

2017 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018 年 7 月 19 日

医療福祉工学部 健康スポーツ科学科

2017 年度主任 武田ひとみ

A の知識や能力等をどの程度獲得したとおもいますかに関しては、専門的な知識技能、困難に直面してもそれに対処していく力、コミュニケーション能力、他人と協調して物事に取り組む力が高得点(3.8)で、ついで自ら課題を見つけそれに取り組む力(3.7)となっていた。これらは昨年度も高値であった。逆に低値を示したのは国際的な視野(専門分野)3.2、(異文化理解)3.0、(国際交流)3.1であり、昨年度も同様であった。

B の授業科目群や教育設備・機器などについては、基礎専門科目、講義、実習、卒業研究やゼミにおける指導に関して満足度が高く、英語以外の外国語科目が低かった。設備に関しては昨年度も低値(3.3)であった学務課、就職課の満足感に上昇(3.7)がみられた。

自由記述欄の本学で良かったと思えることについて記入されている意見として多かったのは

学びたいことが学べた、専門知識が身についた、仲間ができた、大切な友人と一緒に高め合えた、など人間関係や友達づくりに関しての満足度が高く、また、ゼミ活動やゼミで教員の指導、友人との協力、深い学び等に高い満足感がえられ、教員との距離が近く、親身になって相談に乗ってくれた、という教員や指導に対する満足感がのべられていた。

AB の質問に対する解答とこれらの自由記述を総合すると、S 学科の学生は、大学生活のなかで、スポーツや趣味をとおして大切な友人関係を形成し、ゼミ活動で教員による親身な指導を受け、卒業研究を完成するまでに教員とのやりとり、ゼミ仲間との協力、発表をかさねて、困難なことに対処していく力やコミュニケーション能力を身につけたことを自覚し、満足感を得られたということがいえる。

一方、英語科目授業に関してはそれほど満足感が低いわけではないにもかかわらず、国際的な視野専門分野、異文化理解、国際交流)に関して満足度をえられていないということは現在の授業に対する満足感はあるながら、それだけでは国際的な視野を養うまでには至らず、今後、そのほかの科目や、異文化交流の機会など語学教育部門の対策(カリキュラムや学科教員からの働きかけ、学生への国際交流機会関連の情報提供等)が必要とされるかもしれない。

事務関連では就職課の利用を教員からゼミ生に積極的に推奨し、各研究室の就職活動状況を学科会議で教員が共有するだけでなく、就職課へも常に報告することと、就職課からも内定速報をいただくなど、協力いただき、就職率も目標を上回り、学生も就職課の支援について満足している。設備については自由記述欄に本学に改善すべき点ということについては立地についての不満が多く、12号館の不便さや、体育館が使いにくい、バス便が少ない等設備、アクセスに関する不満が多く、ほかにはサークル数が少ない等があった。

役に立った、印象に残っている科目、後輩に勧めたい科目については昨年同様、生理学が最も多く(10)、他には心理学、卒業研究、プレゼミに関する意見も複数(各3)見られた。それらの理由として他の科目のための基礎知識として役に立った、体の仕組みがよくわかった。自分のことを考えるようになった、考える力がついた、仲間と主に高め合えた等、実際に各自が学習によって知識や考える力、仲間と一緒に問題を解決する力などをつけることができたことに満足している意見が多く、人間関係に対する満足感のみならず、知識

の習得やその価値に付いても理解し、学びに対する満足度も高い。

学科内での今回の結果の検討時には、例えば施設に関する質問内容が、S 学科学生が日頃授業で利用する体育施設や実習施設が含まれておらず、学生達が日常の大学生活において施設に満足していたかを調査するには適切ではないという意見が多く出た。自由記述には書けるが、全員が丁寧に書くわけではないので多くの声を拾うにはその学科学生の勉学に必要な、日々利用していた施設に関する満足度を聞くような質問項目を入れたアンケートであることが望まれる。そうすれば、もう少し実際的な調査結果が得られ、今後の検討すべき点が明らかとなるので、是非次年度からは例えば学科ごとの質問群も加える等質問内容の改善を希望したい。

2017年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018年6月29日

総合情報学部 デジタルアート・アニメーション学科

2017年度主任 寺山直哉

卒業生満足度調査における、教育の全体を考慮した総合評価は7.1ポイントで、前年度の7.2ポイントから0.1ポイントの減となった。Q学科教員による対象学生の内、1～3年次の各学生がW学科2015年度教育課程の210名体制となったことによる所属学生数の増加が、Q4年次生に対するサポートの濃度に影響を与えた可能性に加え、QW間の代替科目に関する制限など、学科移行期による教務環境にも原因があったのかもしれない。更には学科名称に対する思い入れなど、感傷的なものも考えられる。

只、概ね本学科の教育設備環境については満足度が高く、JIAMSを始めとする本学の設備環境や教員などへの好意的なアンケート回答もみられるので、引き続き卒業生との関係を良好に保ち、今後WB学科の出口先確保へ向けて、OBOGの本学への帰属意識向上へ努めることも肝要だと考える。

尚、従来から「A-7.a.b.c 国際的な視野」のポイントが、他の項目と比較して低い傾向が続いているが、この辺りの改善策については、引き続きWB学科として国際交流センターとも連携を図り、取り組んでいきたい。

2017 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018 年 6 月 29 日

総合情報学部 デジタルゲーム学科

2017 年度主任 渡部隆志

卒業生満足度調査における、教育の全体を考慮した総合評価は7.0ポイントで、前年度の7.3ポイントから0.3ポイントの減となった。1～3年次が2015年度教育課程の210名定員となり、学科所属学生数の増加が個々の学生に対するサポートの濃度に影響を与えたとも考えられる。よりきめ細やかな学生対応の実施に向けて、学生ポートフォリオをはじめとした各種 ICT ツールの活用によって業務の効率化を図りながら、一人ひとりの学生にしっかり目を向け、さらにはその情報を学科教員全体で共有することが肝要であると認識している。

従来から「A-7.a.b.c 国際的な視野」のポイントが、他の項目と比較して低い傾向が続いている。特別連携入試による中国からの留学生や、アムステル応用科学大学やユトレヒト芸術大学からの研究生受け入れなど、学科での国際交流には積極的に取り組んでいると考えている。しかしながら、学生の実感としてはそれほど高くない結果を受けて、留学生や研究生の受け入れゼミの枠を超えた、新たな働きかけが必要であると考えている。その一つとして、2018年度学科専門科目では「多文化コミュニケーション」を1年次前期に担当している。国際交流センターとも連携を図り、留学生や研究生と学生の新たな関係性の構築が期待されるものである。

2017年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018年7月9日

総合情報学部 情報学科

2017年度主任 渡辺 郁

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

教育目標

本学科では、以下の教育目標で理工系の情報教育を行っている。

- 情報通信技術(ICT)の基盤となる専門知識の獲得
- 即戦力となり得る実践力の育成
- コミュニケーション能力などを中心とした社会性の向上

カリキュラム

本学科のカリキュラムは、ACM(世界最大のコンピュータサイエンスの学会)が策定した標準カリキュラムに対応している。2005年のメディアコンピュータシステム学科開設から、上述の教育目標に基づいてカリキュラムを設計し、2009年度にカリキュラム改定をへて、本年度は、情報学科として更に改善したカリキュラムの実施を開始した。そのカリキュラムでは、特にITキャリア科目の充実を図っている。

JABEE

コンピュータサイエンス教育プログラム(略称CSコース)を設け、外部第三者評価であるJABEE(日本技術者教育認定制度)の認定を継続することを目指し、教育の質やサービスの向上に努めている。なお、JABEE認定を受けないコース(デジタルメディアコース、略称DMコース)の学生に対しても、各科目における合格基準は同一にしている。2017年度にJABEEの認定継続のための受審を受け、継続して認定することが認められた。

シラバス

本学科の専門科目のシラバスにおいては、「授業目標」「授業スケジュール」「合格基準」「評価項目」を必ず明示するようにしている。

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

JABEEの認定を目指すべく、各教員が統一された方針で授業の質を高めることを心がけてきた。2009年度から学科内にFD担当教員を定め、FD会議を開き、内容の点検を行っている。2013年4月から本学科の「コンピュータサイエンス教育プログラム」が「情報および情報関連分野」のJABEE適合プログラムとして継続認定された。そこで受けた改善勧告に対する対応を行い、さらなる教育改善を加えた2017年度からのカリキュラムを前年度策定した。新カリキュラムの点検は次年度に行う。

成績評価

JABEE基準により、成績の相対評価は行うことはできず、シラバスに明示した合格基準と評価項目に基づき絶対評価を行っている。その結果として、科目によっては合格率がかなり低いものもあり、学科の平均としても他学科に比べるとまだ低い。今年度は合格率の数値目標を定め合格率を改善することにした。

3. 学生指導(履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など)について

履修指導

年度末や年度初めに設けられた学科オリエンテーションの時間以外に、1年生向けには「スタディスキル」、2年生向けには「プレゼミ」の中で、学科の教育の方針や JABEE や履修のポイントについて説明を行っている。

教育相談・生活相談

グループ担任の方法にはこれまでに試行錯誤があったが、2009年度からは、新入生を8グループに分けて、1グループにつき主担任1名、副担任1名の教員が担当している（担任は2年ごとの持ち回り）。入学式直後の新入生オリエンテーションでは、2009年度からアイスブレーキングを導入している。また、5月18、19日に、本学科としては初めて学外研修を実施し、その中で学生全員とグループ担任との個人面談をしたり、学生同士や学生と教員が打ち解けるようなイベントをしたりした。

1年次の必修科目である「スタディスキル」においては、欠席が多い学生に対しては、担任から本人や家庭へ電話連絡するようにしている。

就職指導

情報学科では1年生向けにキャリア形成科目の役割を持っている「スタディスキル」を実施した。旧カリキュラムの2年生向けには科目「プレゼミ」の中で4回、キャリア形成のための授業を実施した。

3年生向けに学科独自の進路ガイダンスを2回開催した。初回は4年生で内定を既に得た学生の経験談、2回目はこれからの就活についての説明に重点を置いている。また、後期科目「キャリアプランニング」の中で筆記試験対策、模擬試験を行っている。

3年生の1月からは、研究室単位で就職課を訪問し就職課担当者と懇親を深めグループで就職活動を行うシステムに変更した。就職課へ行っていない学生を捕捉するとともに面談を行い就職課へ行き就職活動を行うように指導している。

4. 卒業研究指導について

本学科では、3年次で「卒業研究」を行っている。2年次の7月に配属の研究室を決定し、2年次の後期にプレゼミを行い、3年次の年度初めから卒業研究を開始し、3年次の年度末に終了する。卒業研究の合格を4年次への進級条件にしている。また、3年次の月～金曜日の3,4時限に卒業研究を割り当てており、原則としてこの時限に他の科目を受講することはできない。

上述のような制度によって、学生に十分な時間をかけて能動的な学習を行わせ、問題解決能力、プログラミング能力、プレゼンテーション能力などを修得させる。これを3年次の年度末までに終えることによって、身に付けた能力を就職活動に役立てることも狙っている。

学科の方針として、研究テーマは一人ずつ異なり、複数人で1テーマは認めていない。合格の基準として、学習・教育目標の達成に加えて、450時間以上の従事、中間報告(口頭発表)2回、20ページ以上の論文、最終発表(口頭発表)、1000行以上のプログラム(CSコースのみ)を定めている。論文と最終発表は複数の教員で評価を行い、可否を判定する。

最終発表会では、各研究室から選抜された学生による優秀研究セッションを設けている。これらの学生は全教員で評価し、最優秀研究を選定する。上位の学生は、当該年度の学業優秀賞に推薦している。

なお、研究をさらに続けたい学生や大学院進学予定者のために、4年次配当の選択科目として「特別研究」を設けている。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

数値による評価については、ほぼ昨年度と同程度である。また、不満の多くはバスに関することであり学科としては対策を取ることにはできない。自由記述の良かった点に関する記述からも、3年次の卒業研究など全体的には好意的な評価が得られている。今後もより多くの学生からより良い評価が得られるよう努力していきたい。

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など 学科独自の教育

学科開設の2005年度から毎年新生に学科指定のノートPCを購入させている。このノートPCには、学科の授業に必要な各種のソフトウェアがあらかじめインストールされている。このPCを活用して、プログラミング能力やコンピュータ運用能力を向上させることを狙っている。また、後述のe-Learningを利用して、一般の授業にも役立っている。

MC2の協力を得て、ウェブベースのe-LearningのMoodleを学科として積極的に活用している。例年約70のコースが設けられており、一般の授業以外に、研究室単位のプレゼミや卒業研究の運用にも利用されている。

「ACM国際大学対抗プログラミングコンテスト」に出場する有志学生の課外活動を学科として支援している。

アクティブ・ラーニング

必修科目として卒業研究、コンピュータシステム演習を行っているのに加え、特別研究やグループプログラミング演習、エンジニアリングデザイン演習など、選択科目にもアクティブ・ラーニングを行う科目がある。

これらの科目は、卒業生満足度調査でも良かった科目として挙げられており、学生に有意義に受け入れられていると判断できる。

離学者対策

離学者対策の一環として、今年度より事務と連携し休みがちな学生には本人及び保護者に直ぐに連絡し、保護者が面談を希望した場合直ちにそれに応じるようにした。その結果2017年度には離学率は4%代に減少し効果があったようである。

7. 添付資料

1. 資料1 情報学科ウェブページ <http://www.cs-oecu.jp/>
2. 資料2 JABEEプログラムへの取り組み状況 <http://cs-oecu.jp/misc/oecu-t-fd/>

2017年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018年 7月 9日

共通教育機構 人間科学教育研究センター

2017年度主任 佐野 正彦

※自由に記載下さい。

(1) 総合科目への尺度評価部分について

総合科目の満足度について、①外国語以外は満足度が3.5(2016年度3.5)、②外国語科目(英語以外)は、3.2(3.2)となっている。基礎専門科目・専門科目(講義)の満足度が、3.7、同(実験・実習・演習など)が、3.8となっていることに比べると、総合科目の評価はやや低く、特に、外国語科目の低調さが目立った結果となっている。ちなみに、人間科学教育研究センターが多くの科目を担当する教職科目については、3.5(3.5)となっている。

なお、総合科目について、学生の授業アンケートでの満足度調査では、この数年の改善傾向が顕著で、専門科目の満足度平均を上回るようになってきていることを考えると、一部には、総合科目の履修が、1・2回生に集中しているため、その印象や評価が、卒業生満足度調査の実施時点では薄れてしまっているという、アンケート自体の技術的な問題も関係していることも否定できない。ただし、低調であるといことは真摯に受け止める必要があると考え、以下のような対策を計画・実施している。

人間科学教育研究センターでは、本年度の事業計画で、すでに総合科目全体の底上げとともに、分野別の重点課題を以下のように設定し、具体的な施策に取り組んでいる。

① 「日本語上達法」関連の科目の充実・強化

寝屋川キャンパスでは、プレイメントテストの実施により新入生の日本語能力、言語活用能力を診断し、特に、入学後の教育に困難が予想される学生を見定めて、さらに各人のレベルや課題を見定め、たとえば、リメディアルの性格をもつ「日本語上達法Ⅰ」を義務づけている。(ア)日本語の読み書きへの苦手意識の克服、(イ)言語を使って思考することの訓練、(ウ)自らの考えや思いを言語化する喜びと自信の体験、(エ)レポートの書き方、ノートの取り方など実践的な演習を行うことで専門科目や他の総合科目を受講するための基礎を養う、ということを目指した授業を実施する。授業途中においても、細かい形成的評価を行い、一人ひとりの進捗度や課題を見定め、丁寧な授業を実施する。

なおこの科目の少人数かつ個別指導の要素の大きい性格を活用し、授業終了後も学習支援の継続が必要な学生との関係を維持し、課外の学習支援活動へとつなげていく計画も作成中である。

② 総合科目のなかでも特色ある科目としての「現代社会を考える」の充実

この科目は、複雑化・多様化する現代社会を学生がよりよく生きるために必要な幅広い知識と、柔軟で多角的・複眼的思考のヒントを得られる内容の講義を、AH教員によるリレー授業で提供するものである。この科目を通じて、学生に多様な考察を受容できるような知的態度を育成することをめざす。特に今年度は、学生の反応へのきめ細かい対応により、学生—教師間の双方向の関係を築くような授業方法の工夫、リレー講義の担当者間の情報共有など関係を密にして、学生の実態や課題等の共通認識を促し、総合科目のなかの看板授業の位置づけにふさわしい科目として、充実させていく。

② 外国語授業(英語以外)

グローバル化の時代において、英語偏重という枠から脱し、アジアの視点を含む第2外国語の学習に

よって視野を広げ、単なる語学学習にとどめず、他文化・自文化への理解を深めることを目標とする。特に、受講生の多い中国語は、週2回授業があるクォーター科目の利点を活用し基礎を固め、後期には、「中国語3」の受講により検定試験の受験、合格にもつなげていく。

(2) 自由記述について

総合科目についての記述は少ないが、そのなかでも「日本語上達法」については、非常に役に立った、自信がついた等の肯定的な意見を寄せる学生が目立った。また、寝屋川でAHが提供している「キャリアデザイン演習」の評判もよい。就活への実用面のみならず、自分を見つめ直したり、広く将来を考える上で、示唆が多いことを指摘する記述が目立った。また、経済学や労働を知ることに関する科目について、深く興味を持ってくれた学生がいることも特徴的である。スポーツ実習も、寝屋川に体育館がない等の条件整備の劣悪さに不満を持つ学生がいる一方で、ハードではないミニスポーツなどが、気分転換やリラックスをさせる時間になったり、運動不足になりがちな生活において基礎体力の維持に役立つなど、精神的、実用的な価値を評価する記述が目立った。激しい運動を苦手とする本学の学生にはかなり合致したスポーツ実習のスタイルのように思われる。

2017年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018年7月3日

共通教育機構 英語教育研究センター

2017年度主任 柏原郁子

■総合科目（英語科目）評価点について

寝屋川キャンパス 総合科目(英語科目) 562名 3.5 (2017)← 3.4 (2016)

四條畷キャンパス 総合科目(英語科目) 438名 3.4 (2017)← 3.3 (2016)

卒業時のアンケートということで、4年次に履修している専門科目、そして卒業に関わる卒業研究やゼミにおける少人数の指導に対し、評価が高くなり、一方、過去に単位をすでに取得している科目について、得てして評価は下がるものであるが、上記の評価を見ると英語科目については時間が経っても満足のいくものであったと判断していいかと思われる。両キャンパスにおいて、評価のポイントが0.1ポイント上がっており、今後も専任及び非常勤講師を対象としたFD活動を毎年行い、授業の教育方法の改善、教務関連事項の確認など、怠らずに行っていきたい。

■自由記述欄について

先にも記した通り、卒業時に数年前の受講した授業について自由記述にコメントを残すことは少ないと思われるが、改善すべき点として挙げられているのは、[E]欄「外国語に関する授業がまだ少ない」(Q学科)というコメントがある位である。

また、[F]で特に役にたった・印象に残った科目について、抜粋であるが以下に挙げる。

○英語コミュニケーション：とても楽しく英語を学ぶことができた・楽しかった・外国人と話せてよかった・とても楽しく有意義な授業になりました・先生がとてもフレンドリーで楽しく、最も印象に残った授業です・明るく楽しく英語に取り組み、やる気が思わず出るような授業で良かった。・楽しかった。ただただ楽しかった。・留学にあたり良い勉強になった。

○英語リーディング：パソコンを使う科目があり、楽しくできる。・とても分かりやすく、授業の進め方も良かった。また受けたいと感じた。・とても分かりやすく英語を教えてもらいました。・生徒への洞察力がすごい。きちんと英語の勉強に集中することができた。・英語の世界は、社会に出ても役立てれるのでいい知識だった。

○英語スキルアップセミナー：自分のペースで勉強するのでやりやすかった。・英語が苦手でも楽しく学ぶことができた・好きな日に15回授業受けられて、忙しい学生生活において出席しやすかった。・まじめに勉強すれば全然できなくてもできるようになる・ネットを使った英語の勉強法が印象に残った

本学には英語を苦手として入学してくる学生が多いにもかかわらず、卒業時に「楽しく英語を学ぶことができた」という授業を提供できたことは喜ばしい。特に評価の高いカルモナ先生には今後も一人でも多くの学生が受講できるよう時間割の配置など工夫していきたい。また学生からも高い評価を受ける授業を今後も展開していくために、毎年行われる授業アンケートのフィードバックも行いながら、英語科目担当者のためのFD研修会にて、アンケート評価の高いクラスを担当する先生方に、授業方法について講演して頂き、授業改善を図っていきたい。

2017年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2018年7月6日

共通教育機構 数理科学教育研究センター

2017年度主任 萬代 武史

設問[A]について、ASセンターが主に関係する項目は2～4であると思われる。大学全体では、「2 専門的な知識・技能」:3.8、「3 物事を論理的に考える力」:3.7 で共に昨年と変わらず、「4 的確な判断力」:3.5 で0.1ポイント下降している。[A]の平均値については3.4で変わらない。この質問項目からASセンターに関する満足度を判断することは難しいが、一定の評価を得ていると考えてよいだろう。このことは我々が採用している習熟度別の授業が浸透して成果を挙げていることに関連しているかも知れない。学部ごとに見ると、工学部と医療福祉工学部は変化がなく、情報通信工学部は0.1ポイント上昇している。項目2～4でも上昇または変化なしで、工学部などに比べてよい変化が見られる。昨年度下降していたので揺らぎの範囲かもしれない。今後も、より学科と相談しながら、シラバスや授業の現場における工夫を重ねてゆく方針である。

設問[B]について、ASセンターが関係する項目は4と5であり、大学全体では、「基礎専門科目・専門科目(講義)」3.7、「基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」3.8と昨年度から0.1ポイントだけ下降している。[B]の平均が3.6であることから、この評価も必ずしも悪いわけではない。項目[B]では、情報工学部が下降気味である。上記同様の考え方で対応してゆくつもりである。

自由記述については、直接ASセンターに關係する内容は限られているが、授業に関する具体的な意見が出されており、授業改善への指針として貴重なものであるといえる。

微分積分では「将来的に役立つから(U)」、「色々役に立つ話なども教えてくれた(U)」とする声が寄せられ、線形代数では「小テストをよくやったので理解しやすかった(H)」「数学の問題を理解しやすいように解説してもらえました(J)」などがある。また、以前は多く寄せられていた「わからない」「難しすぎる」という学生の不満はほとんど見受けられないので、習熟度別クラスが効果的に機能していると判断できるのではないかと。むしろ「数学科目など少し簡易にしすぎている気がしました(H)」が若干気にかかるが、理解不足の学生への配慮やきめ細かな復習に気を配りつつ、レベルの向上を目指したい。

物理関連科目についての自由記述は限られているが、「物理学の実験:レポートを書く事は苦行であったが、それによって改めて大学生としての性分を身にしみて感じる事ができた」「物理学・実験:実験の仕方、レポートの書き方、考察の仕方が身に付いた」「物理学実験:高校にはなかったいろいろな実験器具を使えた」などの意見が寄せられている。実験サポート課の職員と連携を取りながら、基礎専門の物理学・実験から専門の実験への橋渡しができるように、学生へのきめ細やかな指導を行っていることが、学生たちに理解されている結果であろう。初年次で、実験を通じた協働作業や、演習の時間における学び合いを促すように指導していることで、学生たちの横のつながりが構築され、その後の学生生活を豊かなものに行っていることもうかがえる。また力学では、専門科目との重複もあるが「基礎からしっかり教えていただいた点(H)」「ふだんの生活でもなんとなく力について考えるようになった(H)」「丁寧に基礎から力学を教えてもらえる(H)」などの意見が出されている。専門科目に繋がる基礎専門科目の役割をより一層果たしていくことが望まれる。

「他学科間の交流が少ない」といった声も幾つもあり、複数学科を合わせてクラス分けすることは、単に習熟度別授業を実現するためだけではない効果もある。習熟度別クラス間の調整、科目間の調整、基礎専門科目と専門科目の連携などがさらに必要であろう。また「まわりがうるさい」など授業中の環境についての不満、

評価方法に関する意見や休講・補講の連絡が徹底されていない等にも留意しなければならない。

AS センターにおける専任教員・非常勤教員の殆どは1～2 年次生の授業を数多く受け持っており、今までに培ってきた授業の工夫やノウハウは蓄積され共有されてきた。授業のねらいや目的を明確にし、学生へのオリエンテーションの充実を図りながら、習熟度別クラスの充実、アドバンス科目の設置、専門科目との連携を強化しなければならない。また多く非常勤講師を含めて数学・物理の科目毎にそれぞれ責任者（まとめ役）の専任教員を配置しており、時折発生する学生からの注文や意見に対しても迅速に対処できる体制を整えており、迅速な対応には実績がある。

大学院

2017（H29）年度
「修了生満足度調査結果の検討」

2017年度修了生満足度調査結果検討報告書

2018年7月6日

大学院工研究科先端理工学専攻

2017年度専攻主任 阿久津 典子

2017年度は15名修了し、そのうち14名がアンケートに回答した。アンケート結果は[A]の平均が3.6、[B]の平均が3.7、総合評価が8.1であった。調査票に記載されていた過去のデータは2015年度のものであった。2016年度と比較すると全体に良くなっており、[A]は0.2ポイント増加し、[B]でも0.2ポイント増加し、総合評価では0.6ポイント増加した。以下に、詳細について述べる。

1. [A]「本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか」

最も上昇ポイントが高かったのは、7Cの「国際的な視野（国際交流）」であり、1.3ポイント上昇した。2番目に上昇ポイントが高かったのは、7Aの「国際的な視野（専門分野）」であり、0.9ポイントの上昇であった。3番目に上昇ポイントが高かったのは、7Bの「国際的な視野（異文化理解）」であり、0.6ポイントの上昇であった。いずれも「国際的な視野」のポイント上昇が著しかった。これは、2017年10月31日に実施した米国メリーランド大学 Einstein 教授の特別講義のお蔭と考えられる（添付資料）。2016年度はこの項目が全体を通して最低ポイント（2.7, 2.5, 2.0）であったので大いに改善した。年1回の特別講義でこれほどポイントが上昇するので、今後も継続することが望ましい。また、自由記述欄から、海外における国際会議の発表も高評価に繋がったとみられる。

一方、最も下降ポイントが大きかったのは6の「困難に直面してもそれに対処していく力」と10の「他人と協調して物事に取り組む力」であり、0.4ポイント下降した。大学院生になると一人一つの研究テーマになる。毎年、同じように指導されていると思われるが、個人の力が重要になる研究テーマがたまたま多かったのかもしれない。

2. [B]「本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・機器などについて全体的に評価してください」

最も上昇ポイントが高かったのは6の「図書館の利用しやすさ」と2の「大学院履修要覧等の諸資料」であり、0.8ポイントの上昇であった。3番目に上昇ポイントが高かったのは13の「寢屋川就職課／四條畷就職課 事務サービス」であり、0.7ポイントの上昇であった。いずれも職員の方々の努力と熱意の反映と思われる。

一方、最も下降ポイントが大きかったのは10の「TA制度（担当者の立場から）」であり、0.7ポイントの下降であった。しかし、前年度が4.8と非常に高かったため、0.7ポイント下降しても4.1ポイントで有り、依然として評価が高い。2番目に下降ポイントが大きかったのは4の「研究やゼミにおける指導」であり、0.6ポイントの下降であった。しかし、前年度が4.7と非常に高かったため、0.6ポイント下降しても4.1ポイントで有り、依然として評価が高い。

総合評価について、幅広い専門科目の勉強ができたこと、奨学金が充実していたこと、国際会議や学会などに参加できたことが評価の対象になったことが自由記述から読み取れた。一方、改善すべき点について自由記述欄からは、専門科目をもっと深堀したいという希望が読み取れた。

※ 添付資料があれば添えてください。

1. 資料1 米国メーランド大学 Einstein 教授の特別講義案内

大阪電気通信大学大学院
先端理工学専攻・電子通信工学専攻 合同ゼミナール

特別講義

特別講師

メリーランド大学

Theodore L. Einstein 教授

講演題目

“How General Ideas in Statistical Physics Helps
One Understand Behavior of an Enormous
Range of Systems“

日本語解説 山本真人 博士 (大阪大学産業科学研究所)

日時 10月31日(火) 17:00~18:30

場所 J号館6階 J610 教室

メリーランド大学のEinstein教授は固体物理、特に表面・界面の理論研究分野で卓越した業績をあげています。興味をお持ちの先生方や学部学生・他専攻の院生の聴講を歓迎いたします。なお、先端理工学専攻及び電子通信工学専攻の院生は必修ですので、必ず出席してください。

Abstract

While important for catalysis and growth of devices, steps on crystal surfaces also have fascinating theoretical properties based on the analogy between their two-dimensional configurations and the world lines (time evolution) of hard particles in one dimension. An adequate accounting of the distribution of the step separations (the crystal's terrace widths) can be obtained from a simple Schroedinger equation; a much better approximation is based on profound ideas about universal behavior of fluctuations. There is similar behavior in the early growth of islands on surfaces. Analogies of this nanoscale behavior are also seen in our daily lives, at over 10 orders of magnitude larger scale. Examples include times between buses in some Mexican cities, distributions of areas around subway stations, areas of districts (Japanese gun), and spacings between parked cars or birds on a wire.

世話人 阿久津典子 内線(2267)

2017 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2018 年 6 月 7 日

大学院工学研究科電子通信工学専攻

2017 年度 専攻主任 富岡 明宏

2017年度卒業生は3名しかいなかったため、今回のアンケート調査はバラつきと不確定さを伴うものとして分析する必要がある。だが、全体を通して1昨年度と同じ程度かやや高い評価が得られていて、電子通信工学専攻での教育は成功を修めていると言ってよい。特に勉学面での達成度を尋ねた[A]1～4の項目(幅広い分野の教養、専門的知識・技能、論理的に考える力、的確な判断力)については、全員が評価4をつけ、大学院生活を通して獲得した知識や能力については、誇りをもって高い達成感を表明している。大学院進学の意味がこの事実裏打ちされており、大学院進学説明会で学部学生に訴えているこの高い教育効果を今後も維持するとともに、1年生から3年生を通して全学部生に大学院進学を一層勧め、進学率を高める努力を継続したい。この効果が実り、今年度のM1は7名まで回復している。1昨年度までは比較的評価が低かった「国際性」も、(1)大学院ゼミナールでの発表題目やアブストラクトなどに英語を併記する試みを行ったこと、(2)担当教員が他大学との協力や外国施設を研究に利用するなど、の努力を続けた結果評価が3.2まで向上した。これと轍を一にして、コミュニケーション能力、リーダーシップ、協調して取り組む力のいずれもスコアが向上している。これらは専攻担当教員の指導だけでなく、就職課職員の方々の面談など、広い意味のキャリア教育が結実したものと考えられる。今後も、教員および大学院生自身が院生の資質向上を折に触れてチェックしてゆく工夫をしたい。

大学院教育の質の高さは[B]の各項目にも表れている。大学院生は勉学に熱心に取り組む人が多く、講義への取り組み、大学院ゼミナールでの発表、外部講師による講演(長年開発に携わってこられた技術者の方に「燃料電池」について講演を依頼)のいずれにも全員積極的に取り組んだことが窺える。[A]～[C]のいずれの項目についても、大学院生の高い達成感・自己肯定的な評価が現れており、本専攻での教育が高い効果を生んでいるといえよう。今後とも進学率を高め、同じ研究分野の同僚学生を増やしてあげることで、院生がお互いに研究内容を相談したり、助言したりできる環境を構築することになり、院生の研究環境が一層向上、充実した大学院生活をおくることにつながる、という正のスパイラルが実現できよう。

※ 添付資料：資料1 学生アンケート(非公開資料)

2017年度修了生満足度調査結果検討報告書

2018年7月9日

大学院工学研究科制御機械工学専攻

2017年度専攻主任 高岡 大造

概ねよい評価結果になっているが、国際的な視野(異文化理解)と国際的な視野(国際交流)については評価結果があまり良くなかった。国際的な視野については、「国際工学技術特論」や「テクニカルコミュニケーション」により浸透させることを考えており、自由意見の中では複数の好印象を持った意見がみられたが、全体的には満足な結果が得られなかったようである。したがって、今後は海外の大学との交流なども検討する余地があると考えます。

専攻で力を入れている对外発表については、自由意見で満足であったことを述懐しているものが散見され、否定的な意見はなかった。大変喜ばしいことで、今後も力を入れていきたい。

2017 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2018 年 6 月 4 日

大学院工学研究科情報工学専攻

2018 年度専攻主任 小森 政嗣

満足度調査結果の総合評価については、大きな変化は認められない（2015 年度：7.4，2016 年度：7.5，2017 年度：7.4）。サンプルサイズが小さく、また 5 段階のリッカート尺度で評価している以上、総合評価の経年変化について、何かしらの結論を導くことは難しい。しかしながら、個々の項目を詳細に検討すると、2015 年度から継続的なトレンドを認めることができる。

評価が継続的に低下している項目は「幅広い分野にわたる教養」および「自ら課題を見つけそれに取り組む力」である。これらは大学院情報工学専攻のディプロマポリシーにおいて育成することが謳われている能力の一つである「複雑な科学・技術問題を分析し解決する能力」と関連した項目であると言えるだろう。一般に、「情報工学」の分野は、他の工学分野と比較しても、より幅広い分野に関する横断的な知識や教養が求められ、また新たな価値を創造することが求められる分野である。したがって、上記項目において評価が低下していることは重大な問題と捉える必要があり、今後は、カリキュラムを改善することで、情報工学と社会との関わりを学生に意識させ、学生に幅広い分野を主体的に学ぶことを促していく必要があると考えられる。また、自由記述欄に提案されていたように「他研究室との交流・他学科・専攻との交流を増やす」ための施策を講じる必要があるだろう。

一方、評価が継続的に向上しているのは「国際的な視野」に関する 3 項目（7A, 7B, 7C）である。これらの評価が高かった背景には、海外の研究者を招き講演会を行ったこと、半数の M2 学生が国際会議での口頭発表・ポスター発表を行い、また一部は英語の原著論文を投稿したことがあると考えられる。また、必修科目である情報工学演習において、2014 年度から年に 2 回の英語の論文紹介を課していることも、国際的な視野の醸成に貢献した可能性がある。今後も積極的に海外からの講演者の招聘を行うとともに、英語による海外での学会発表を促していく必要があるといえる。

また、「研究やゼミにおける指導」をはじめとして授業科目に関する満足度は総じて高く、情報工学専攻のカリキュラムが昨年度の修了生に受け入れられていたことを示している。また、ゼミ指導における高い満足度から、各研究室で熱心で丁寧な指導が行われていたことが窺える。

「TA 制度」に関する項目も高く評価されていた。TA を行うことで学部 下級生との交流機会が生まれ、より多くの交流が双方にとって有益になったと思われる。今後も より一層下級生との交流機会を増やすことが大学全体を活性化させると考えられる。

一方、施設および設備・機器については厳しい声が寄せられた。特に「図書館の図書・雑誌等の充実度」「図書館の利用しやすさ」の評価平均値は非常に低く、また最低評価である「1」をつけた学生も複数存在した。今後は大学院生の学習環境の改善を図っていく必要があるだろう。また、教務課・学生課・就職課の事務サービスに対して少なくない学生が「1」もしくは「2」の評価を与えており、学生の事務サービスに対するニーズがどこにあるのかインタビューなどを通して調査する必要があると考えられる。

自由記述欄において改善を要望する事項として「大学院生を増やす」ことが挙げられている。大学院生が少ないことは本専攻の最大の問題であり、学生にとっても大きなデメリットである。情報工学専攻では、引き続き大学院生の増加の方策について様々な観点から取り組んでいく必要があるだろう。

2017年度修了生満足度調査結果検討報告書

2018年 7月 24日

大学院総合情報学研究科デジタルアート・アニメーション学専攻

2017年度専攻主任 上田 和浩

2017年度の大学院修了生の満足度について、2016年度が2名、2017年度が5名と、いずれも調査数が少ないために、単純な比較検討は難しいかもしれないが、前年度と比較して、[A] 本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますかという質問群に対して、5、自ら課題を見つけそれに取り組む、6、困難に直面してもそれに対処していく力、8 コミュニケーション能力などの数値が上がった。それに対して、1、幅広い分野にわたる教養、2、専門的な知識・教養、4、的確な判断力、10、他人と強調して物事に取り組む力などは、昨年度より少し下がった。また、3 物事を論理的に考える力、7A 国際的な視野(専門分野)、7B 国際的な視野(異文化理解)、などは昨年度より大きな変化はなかった。

2017年度は積極的に他学科や学外の人間と共同研究、制作を行う学生が多かったので、そういった点でのスキルアップを実感した学生による評価ではないかと推測する。自由記述においても、学会発表に参加できたこと、他学科(専攻)の教員との研究ができたこと、ディスカッション形式の授業に参加できたことなどを良かった点として評価、記載する学生がいたことはそのことを裏付けるものとする。また、[B] 本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・機器などについて全体的に評価してくださいという項目群に対しては、ほぼすべての項目の評価が下がったのが残念である。前年度の評価が平均4.9と異様に高かったことが大きく、それ以上に上げることは難しかったという点是否めないが、前年度の評価時に、その高評価の維持が課題である旨の報告をしていたので残念である。特に図書館の利用に関してその利用を促すような呼びかけ、働きかけがさらに必要ではないかと思う。

総合評価としては8.3あり、決して低い数字ではないが、前年度の9.0からの若干の低下はやはり残念である。10の評価をしてくれた学生もいたので、満足度が低いと思われる学生への細かなケア、指導が必要である。

自由記述ではWeb履修など、学部で対応していることが大学院では軽視されていることに対する不満の記述があった。OECUMypageによる学生情報の共有もようやく対応してもらえるようになったが、いざ、学生情報を教員が記載しようとする、学部の学生の情報は記載できても、大学院の学生の情報を追記するボタンが無いなど、中途半端な対応で終わってしまっているのが残念である。この辺りは次年度に向けてシステムを更新している最中なので、改善を希望する。

また、共同ゼミでの教員の出席率について不満がある記載もあった。共同ゼミは専攻で独自に行っているもので、オフィシャルなものではないので、どうしても他の業務を優先せざるを得ない場合もある。しかしそのあたりの事情は学生にとっては関係ないので、学生に周知させるか、正式な授業枠として設定するなどの措置が必要になるかと思う。

2017 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2018 年 7 月 2 日

大学院総合情報学研究科デジタルゲーム学専攻

2017 年度専攻主任 門林 理恵子

今回の調査結果では、知識や能力の獲得に関する質問[A]は 4.2, 大学院教育や設備・機器に関する質問[B]は 4.1, 教育の全体を考慮した総合評価[C]は 8.1 と高い評価を得られた。個別に見れば、項目[A]の「困難に直面してもそれに対処していく力」は 4.5, 「自ら課題を見つけそれに取り組む力」「国際的な視野(専門分野)」は 4.4 であり、大学院修士課程で修得すべき能力の獲得が着実にできていると考えられる。

一方、項目[A]の「国際的な視野(国際交流)」と「リーダーシップ」はそれぞれ 3.7 と 3.9 と低めであったが、これは修了生の多くが留学生であり日本語の能力の獲得が十分ではなく、日本人学生との交流や日本人学生を含むグループワーク等でのリーダーシップの発揮が困難であったためと思われる。教員および国際交流センターは日頃からきめ細かな支援を行っているが、各自が日本語の習得により積極的に取り組むよう指導の強化を行っていききたい。

2017 年度修了生満足度調査結果検討報告書

大学院総合情報学研究科 コンピュータサイエンス専攻

2017 年度 専攻主任 登尾 啓史

我々の専攻の総合評価は6.3から8.0へと大きく上昇している。過去4年度を見てみると、年度推移2017←2016←2015←2014←2013、人数推移5←13(M2の実数は10であり、M1が3名混ざっている。これより、正確な比較にはなっていないことをお詫びする。)←7←6←8、総合評価推移8.0←6.3←8.0←8.0←8.3となっており、大学院生の人数と総合評価は反比例している。

専攻の講義等、毎年微修正をしているものの、前年度に比べて大きく変更したところはない。よって、このような評価の推移は、大学院の大衆化によるものと推察される。実際、大学全体では院生志願者が急減している中で、我々の専攻は多くの学生を確保している。しかし、そのほとんどの学生の出身母体はメディアコンピュータシステム学科であり、かつ推薦入試が中心なので、人数が減少すれば質が担保されるという関係であると推察される。

さて、主要 2 評価である「[A項目]本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか。」では、“2 専門的な知識・技能”および“9 リーダーシップ”の上昇が著しく、三菱電機株式会社に2名入社したり、国際会議で Best Paper Award を受賞したりと、近年まれに見る“少数精鋭”の院生たちであったことが窺える。

また、「[B項目]本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・機器などについて全体的に評価してください」においても、ほぼすべての項目で評価が大きな変化はないが、“10 TA 制度(担当者の立場から)”が格段に上昇している。これは、院生数の減少に伴って、奨学金収入およびアルバイト収入が例年に比べて比較的潤沢に配分されたのではないかと推察する。

最後に、自由記述について、特に目立った否定的な記述は見られなかった。本専攻においては、国際会議や学会の全国大会など、国内外の“他流試合”の学会発表こそが、学生を真の意味で鍛え、他大学院の学生と共に仕事をする就職後に生きるものと考えている。本専攻では、前述の学会発表は、修了の必要条件としており、毎年多数の学生が国際会議や学会の全国大会で発表している。そして、この発表に関して、指導教員は責任をもって指導していることから、「4 研究やゼミにおける指導」の評価が例年通り高得点を維持しているものと考えている。

2017 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2018 年 7 月 6 日

大学院医療福祉工学研究科医療福祉工学専攻

2017 年度専攻主任 田中則子

[A] 本学での大学院生活を通して獲得した知識や能力の項目は平均 3.6 であり、昨年度（2016 年度）平均 3.8 と比較して 0.2 ポイント下回ったものの、おおむね同程度の結果であった。昨年度課題として挙げていた「リーダーシップ」は昨年よりも 0.3 ポイント上回る成果をあげていた。しかし、「国際的な視野」の項目はいずれも 0.2~0.4 ポイント昨年より下回る結果であった。引き続き、国際的な講演会への参加機会や国際学会への参加、海外論文情報の検索・抄読などを積極的にすすめて、学生の国際的な視野拡大にむけて、専攻教員と協力して進めていきたい。自由記載欄には、「英語論文に関する授業」を望む声もあり、これについては今後の教授内容に含めていきたい。

[B] 本学での大学院教育（授業科目群、設備・機器など）については平均 3.7 であり、昨年度（2016 年度）平均 4.1 と比較して 0.4 ポイント下回っている。図書館の利用しやすさや事務サービスに関わる項目が 3.0~2.9 と特に低い値となっていた。自由記載欄の学生への連絡不足の意見については、担当教員からゼミ生への連絡のほか、院生連絡網を積極的に利用した情報共有に取り組むたい。また、教員と事務との連携不足の指摘や、バスの本数増を希望する意見もあった。この点については、教員への協力依頼とともに、事務局へも要望を伝えていきたい。

プラス面としては、ティーチングアシスタントや他者へ教える経験が非常にためになったという意見が多くみられた。さらに専攻内のさまざまな分野の教員による指導のみならず、外部講師による特別講義の充実や学会・研修会参加を積極的に促していきたい。

[C] 本学での大学院教育総合評価は、「8.1」となっており、昨年度（2016 年度）8.2 とほぼ同程度の値となっていた。とても充実していたといううれしい意見もあった。前述の改善点を含めて、さらに大学院教育の充実に取り組んでいきたい。

■ 参考

当報告書と合わせ下記の資料が参考となることを、添えておきます。

『教育基本3方針（ポリシー）』

<http://www.osakac.ac.jp/about/policy/>

2018年8月
教育開発推進センター
寝屋川キャンパスF号館2F
〒572-8530 寝屋川市初町18-8・内線：3129
ced-office@osakac.ac.jp